

# 9年間で3段階に分けた指導で 関係構築と社会参画の力を育成

## 三鷹市立 小・中学校

東京都三鷹市では、一人ひとりの子どもの「人間力」「社会力」を育てるという教育ビジョンに則り、市内すべての学校で小中一貫教育を導入している。起業家育成のコンセプトに着目、中学校卒業時に身に付けておくべき力を設定し、9年間の「キャリア・アントレプレナーシップ教育」を行っている。

### 小中の教員が 相互に乗り入れ授業

三鷹市の教育施策の柱である「三鷹市教育ビジョン」に基づいて2006年度に誕生したのが、小中一貫教育を行う「にしみたか学園」だ。同学園は、既存の2つの小学校と1つの中学校が教育目標やカリキュラムを共有する形で開園した。各校は従来の校舎を使用しながらも、小学校同士、あるいは小学校と中学校の間で児童・生徒、教員がさまざまな形で交流。一体感のある教育を行っている。

児童・生徒の交流として、2つの小学校の6年生と中学1年生が合同で、三味線や着付け、茶道などの伝統文化について学ぶ「交流学习」の時間がある。また、3校の児童・生徒の混合チームで競い合う合同スポーツ大会や、学区域における合同地域清掃も行われている。クラブ活動や生徒会活動などでも交流がある。

全教員に小中両校の兼務を発令、相互に乗り入れて授業を行う。小学校教員のきめ細かい指導力、中学校教員の教科の専門性を、それぞれ他方の授業

に生かしている。教員同士の交流や連携が深まることによって、お互いに指導に関する責任転嫁がなくなり、それがさらに連携をスムーズにするという好循環を生んでいる。

にしみたか学園の取り組みを基に、市内全域で小中一貫教育を導入する準備が進められ、2008、2009年度に計6つの学園が新設された。これにより、15の小学校と7つの中学校のすべてが7学園のいずれかに所属することとなった。

### 起業家教育を通して 生きる力を育てる

三鷹市教育ビジョンのねらいは、一人ひとりの児童・生徒に「人間力」「社会力」をつけることだ。市が考える「人間力」とは、基礎的な素養を身に付け、自己表現を図る力、身近な人々と適切な関係を結び生きていく力を指す。「社会力」は、身近な人間関係を超越して社会とかかわりを持ち、その一員となって役割を果たしながら自己実現を図る力だ。

市では、この2つの力は「生きる

力」に通じ、教員からの押しつけではなく、自らの学びの中で身に付けていくべきものだと考えている。中学校卒業時点で生徒が身に付けるべき「人間力」「社会力」を見据えて小中一貫教育のカリキュラムを編成。その中で、2つの力を確実に修得させるための「生き方指導」として「キャリア・アントレプレナーシップ教育」を採用している(図表)。

「アントレプレナーシップ教育(起業家教育)のコンセプト、つまり起業の精神や意識を学び、自己啓発をしていくという点が、私たちが考える『生き方指導』と一致する」と三鷹市教育委員会の貝ノ瀬教育長は言う。

児童・生徒の成長段階と9年間の継続性を考慮して、学年ごと、授業ごとに、どのような学習指導によるキャリア・アントレプレナーシップ教育を行うかを詳細に検討した。

成長段階に応じた教育目標として、小学1~4年には「起業家精神の開発」、小学5~中学1年には「起業家精神の育成」、中学2、3年には「起業家精神の伸長」が掲げられている。児童・生徒が自身の発想を生かしなが

ら、表現力、チームワーク力、問題発見力、情報収集力、プレゼンテーション能力などを、学年が上がるごとに少しずつ積み重ねることをめざしている。その過程で、「計画をうまく立てられる」「人前で話すのが得意」など、自分の長所を見つけさせるのもキャリア・アントレプレナーシップ教育の目的のひとつだ。

三鷹市では、2006年度から一部の小・中学校を、地域が運営に参加するコミュニティ・スクールに移行。2008年度にはすべての学校が移行した。地域との協力関係は、キャリア・アントレプレナーシップ教育にも生かされている。一例を挙げると、鷹南学園では、地元のアニメーション制作会社の協力を得て、小学5年生の授業にアニメ作りを採り入れた。

「児童・生徒は、“その道のプロ”に評価してもらうことによって自尊感情を高め、学ぶ楽しさを感じるようになる。不十分なところを指摘してもらえば、社会の厳しさも学べる」と三鷹市教育委員会の松永透課長は言う。

### 学ぶ気持ちに火がつき 教科学習の意欲も向上

2011年度、にしみたか学園の中学1年生が、学区域内の安全面の課題を調べ、安全マップ作りに取り組んだ。完成したマップを地域の保育園や幼稚園、老人福祉施設などに配付すると、大いに喜ばれたという。

同学園の中学2年生は、ボランティア体験や福祉事業の調べ学習を基に、ゴミ問題やバリアフリーなど地域の課題を見つけ出し、改善策を考えた。発表会では、市議会議員の評価を受けた。

自分たちで調べ、考えて作ったものを評価してもらえた経験は、前向きに

取り組む熱意や、自発的に努力する姿勢につながるはずだ。貝ノ瀬教育長は、「こうした取り組みを通して、児童・生徒は次第に意欲的になり、責任感や協調性などを学んでいく。学ぶ気持ちに火がつき、他の教科

の学習や活動にも積極的になる。キャリア・アントレプレナーシップ教育に期待するのはそこだ」と話す。

にしみたか学園が誕生して丸6年を経つ。児童・生徒は、率先して学校新聞を作ったり、やりたいことを提案したりするなど、自発的な動きが活発になったという。「自分が社会の中でどう活躍できるかを考え、実践できる児童・生徒にしたい。この教育を高校につなぎたいと思うし、さらに、大学でより高次元なものに発展させてほしい。こうした教育が広がれば、世界に誇れる人材をもっと多く育成できるだろう」と貝ノ瀬教育長は語る。

### 近隣大学との交流が 児童・生徒、教員に刺激

三鷹市の小中一貫教育の特徴として、大学との交流が盛んなことが挙げられる。国際基督教大学の鈴木典比古前学長が三鷹市の教育委員であることから、特に同大学との交流の機会は多い。おおさわ学園は、2008年度から同大学とともにESD(持続可能な開発に関する教育)研究に取り組んでいる。その一環として、児童・生徒が地球規模の環境問題について調べたり、

海外の中学校教員、大学教員の授業を受けたりする。思考力やグローバルな視点の育成に役立てられている。学園の教員も、大学教員の研究から刺激を受け、指導者としての意欲が向上するという。

三鷹市が運営に携わる民学産公の協働組織・三鷹ネットワーク大学との交流にも、期待がかかる。同ネットワークには国際基督教大学、杏林大学、亜細亜大学など、近隣の大学が加盟しており、小・中学校の教員がこれらの大学の教員の講義を受ける機会もある。

貝ノ瀬教育長は、「文部科学省は教員免許取得の要件を修士課程修了とする検討を始めた。小・中学校の教員に高い専門性が求められているということであり、現職の教員も大学とかかわり、専門知識を身に付けることが重要だ」と語った。

一方で同氏は、大学側も、小・中学校との交流を教育力向上に生かすよう提案する。「大学教員は研究者であるだけでなく、優れた教育者でもあってほしい。児童・生徒一人ひとりの個性や能力、興味、関心をふまえた小・中学校での指導を体験することが、教育力の向上につながるのではないだろうか」。

